

歴代誌第一 4章 9 - 10節 「祝福を求める祈り」

1 A 祈りによる重用

2 A 私の必要

1 B 祝福

2 B 地境の拡大

3 B 主の御手

4 B 悪からの守り

3 A 祈りの答え

本文

私たちは今日から歴代誌第一を学びます。列王記を終えて、歴代誌を学びますと、また繰り返しのなか？
と思ってしまうのですが、新たな視点から書き出している書物です。午後には 1 章から 9 章まで進みたいと思
います。今朝は、4 章 9-10 節に注目したいと思います。

9 ヤベツは彼の兄弟たちよりも重んじられた。彼の母は、「私が悲しみのうちにこの子を産んだから。」と言って、
彼にヤベツという名をつけた。10 ヤベツはイスラエルの神に呼ばわって言った。「私を大いに祝福し、私の地境
を広げてくださいますように。御手が私とともにあり、わざわざいから遠ざけて私が苦しむことのないようにしてくだ
さいますように。」そこで神は彼の願ったことをかなえられた。

1 A 祈りによる重用

歴代誌には、祈る人、主を呼び求める人が多く出てきます。1 章から 9 章までの中で、呼び求める人が何
人か出てきますが、ヤベツはその一人です。彼はユダ族の人ですが、名前の列挙されている中で突然、今
読んだ逸話が挿入されています。祈り求めた人として出てきます。

他の兄弟たちよりも重んじられていた、とあります。まことの意味で重んじられる人は誰なのか？神に用いら
れる人は誰なのか、と言いますと、神に祈り求める人です。「ですから、私は願うのです。男は、怒ったり言い
争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい。（テモテ第一 2:8）」祈りによって、物
事が動いていきます。ヤコブは、こう言いました。「義人の祈りは働くと、大きな力があります。（ヤコブ 5:16）」
神が働かれるのを人々が見ていき、人々はその祈りの人を重んじるようになります。

彼の名前、ヤベツという名は「悲しみ」でありました。母親が彼を産んだ時に難産だったのでしょうか、あるい
は障害をもって生まれたのでしょうか、彼にそのような名を付けました。聖書の時代、人の名はその人の性格

や人生を言い当てるものとして重要に見られていました。今も、キリスト者の名前を見ていると、興味深いことに両親がクリスチャンではないのに、キリスト教的な意味合いを持つものがあります。私の名前は清正ですが、あまりにも大きな名前ですね、「清く、正しい」のです！私は全然、清くも、正しくありません。けれども、新約聖書に何度なく、キリストにあって罪がきよめられ、信仰によって義と認められている、という福音があります。キリストによって清められ、正しいとみなされたのだ、という預言的な意味合いもあるのではないのでしょうか。

ですから、ヤベツは悲しみの人生を歩むのか、と思ったに違いありません。母親が名付けたけれども、その意味合いがあまりにも悲しいので、それを変えた例が聖書にあります。ヤコブの妻ラケルが、男の子を産む時にそれが難産だったので、「ベン・オニ」と名付けて死にました。「私の苦しみの子」という意味でした。けれども、父は「ベニヤミン」と名付けました。「右手の子」という意味です。彼は自分の名前を変えませんでした、その名前の通りにならぬよう、祈り始めました。

2 A 私の必要

1 B 祝福

彼は、イスラエルの神に祈りました。そして初めに祈ったことは、「私を大いに祝福し」てください、というものです。イスラエル、つまりヤコブに対して主が、彼とその子孫を大いに祝福する、と約束してくださいました。その約束の通りに、私を祝福してくださいと祈ったのです。

「私を祝福してください」なんて、自己中心的な祈りではないか？という疑問が浮かんだ人はいるでしょうか？自分のことではなく、他の人々にやさしくしていくこと、こういうことを祈るべきなのではないか？と思いましたでしょうか？これは、多くの人が問いかける言葉です。自分が救われること、自分が祝福されること、これを願うのは、自己中心的であると言います。また、自分は他の人たちを世話するべきで、自分のことを祈るのはおこがましい、と思うのです。自分が主から受けたことは話さないで、他の人のことを世話することが霊的だ、と勘違いしている人もいます。

これは、偽りの謙遜です。日本語に「遠慮」という言葉がありますが、ある人が英語に訳せば、「偽りの謙遜“false humility”だ」と言いました。主が自分を祝福されることを祈らないのは、主ご自身が自分の生活に関わるようになる、介入してこられることを知っているからです。偽りの謙遜を示した人でアハズというユダの王がいますが、イザヤが彼に「主にしるしを求めなさい」と促しましたが、彼は、「主を試すことなどできません」と言いました。そしてイザヤは彼に、「このようにして、あなたは主を煩わすのか？」と答えています。主を試すことなどはしたくない、と思うときに、実はしるしを求めて、主が答えてくだされば自分は主に仕えなければいけないと分かっているから、主を試さないと答えています。

父なる神は、私たちがどのような小さな事にもご自身に関わるように、抛り頼むように願われています。イエス様が祈りなさいと命じられた祈りにも、「日用の糧を日々お与えください」とあります。御国が地上に来ますよう

に、という大きな幻の祈りを捧げた後に、いきなり日ごとの糧を与えてくださいと祈れ、と命じておられます。そして、ピリピ書 4 章 6 節には、こういう約束があります。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。(4:6)」どんなことでも、思い煩いを主に知っていただいて、感謝と願いをもって主に祈りを捧げるのです。そうすれば、主がその心と思いを、神の平安で守ってくださいます。

ガラテヤ書 3 章 9 節に、「そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。」とあります。ヤベツがアブラハムの神に祈り、その祝福を信じて祈ったのと同じように、神は私たちを祝福したいと願っておられます。もし、自分が愛に満たされることなく、どのようにしてキリストの愛を他の人々に分け与えていくことができるのでしょうか？主が私を祝福してください、というのは、次に他の人々を祝福するための必要なプロセスです。

2 B 地境の拡大

次の祈りが、「私の地境を広げてくださいますように。」であります。これはヤベツにとっては、主がイスラエルに与えられた相続地があり、事実その相続を約束通りに広げてください、という祈りです。けれども、私たちの生活にも当てはめることができます。私が、どれだけ主が約束されている領域まで、自分の視野を広げているかどうか、であります。

私たちは根本的に内向きに出来ています。つまり、自分自身という領域しか見えていません。以前、ある牧師の皮肉を込めた言葉で大笑いしたことがあります。こう言っていました。「自分が他人にどう思われているか心配しないでいなさい。あなたと同じように、その人たちは自分のことしか考えていないから。」かなり辛辣ですが事実ですね。少し安心しますが、プライドも傷つけられます。

そして私たちの関心の領域は、自分のすぐ周りにいる友人や知人です。この少人数の人たちの中で自分は神の恵みを受けたいと願います。その外側にいる人々、外周にいる人々のことが目に留まりません。クリスチャンがそのようになってはいけません。そのような領域を「交わり」という名称で使っても、外側からは閉ざされた一つの分派のようになっています。言い換えれば、交わりのタコソボ化です。交わりとは、そんなものではありません。エペソ 2 章後半には、異邦人がキリストに会ってイスラエルの共同体の中に入ってくることができる、キリストこそが平和で二つを一つにする、と言っています。これは、まったく異なる国、民族の人がただキリストにあるということで、深い付き合いをしていることを意味しています。

そして、私たちの地境は自分の教会外の人々にも届きます。私たちは幸い、他の教会、他の民族の兄弟姉妹と顔を合わせることができています。彼らがただここを動いているなどという関心しかありませんか？それとも、日本に暮らしていて、どのようなところを通っているのだろう。信仰生活はどのように守っているのだろう？このように思ったことはありますか？その人は、地境が教会の外にも広がっている人です。それから、自分の周り、自

分の国のこと、そして世界のことへと広がっていきます。

ところで、神はどこまで地境を拡げておられるかご存知ですか？「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。（ヨハネ 3:16）」世界を愛されたのです。イザヤ書を見れば、地の果て果てまで、島々にまで、この方が主なる神であることが明らかにされることが書かれています。神の関心は全世界なのです。ですから、多くのキリスト者がまだ行ったことのない地域に、ただキリストが命じられているという理由で福音を携えていくのです。

この前のカルバリーチャペル牧師会議の時に、まだ二十代前半の白人の若者が、私の朝食のテーブルに座りました。そのテーブルは、韓国人の牧師、また韓国にいる宣教師がなんとなくいっしょになってご飯を食べているところでした。彼が話しはじめたら、目が点になりました。彼は新しい聖書学校を、アメリカ国内ですべて韓国語あるいは韓国語翻訳によって、韓国にいる留学生を招く、そのような学校の校長先生なのです。どうやって、そんなことが？と思いましたが、退職される銀行家である父の跡を継ぐかどうか迷っていましたが、父から事業資金の一部をもらい、それで学校を始めます。韓国には数か月いたことがあるのみです。新しい学生を募るために、何の連絡も取らずに、突然、一か月ぐらい滞在して、数十人の申込者が表れました！考えてみてください、ちゃんとした学校法人にするのですから、どれほどの大きな事業であるか、と思うのですが、この二十代前半の若者はとにかく信仰によって踏み出して、主がこのことを成し遂げてくださったのです。

主は皆さんを祝福し、その地境を拡げたいと願っておられます。自分の世界の殻から抜け出しましょう。

3 B 主の御手

そしてヤベツの三つ目の願い求めは、「御手が私とともにあ」るように、というものです。これは主のご臨在があるように、という意味であるし、主が守り、主が導いてください、という意味です。モーセは、金の子牛で罪を犯したイスラエルのことを執り成して、神にこのように祈りました。「もし、あなたご自身がいっしょにおいでにならないなら、私たちをここから上らせないでください。私とあなたの民とが、あなたのお心にかなっていることは、いったい何によって知られるのでしょうか。それは、あなたが私たちといっしょにおいでになって、私とあなたの民が、地上のすべての民と区別されることによるのではないのでしょうか。（出エジプト記 33:15-16）」主がともにおられないのであれば、いっしょに行かないでくださいと祈ったのです。もし主の御手がなければ、そこがどんなに良い土地であっても意味がないからです。

主の御手があるためには、私たち自身が主の御心の中になければいけません。イスラエル人が、カデシュ・バルネアまで来て、不信の罪を犯してエジプトに戻りたいと行った時に、神は四十年間荒野をさまよと宣言されました。その後で、一部が、「とにかく行ってみよう」と言ったのですが、モーセは、「主がともにおられない。行くのはやめなさい。」と言いました。案の定、コテンパンにやられて、帰ってきました。同じことを行なっている、主の御手があるのかどうか、そして自分が主の御心を行なっているのかどうかで全く変わってくるのです。

4 B 悪からの守り

そしてヤベツの最後の願い求めは、「わざわざから遠ざけて私が苦しむことのないようにしてくださいように。」でした。この「災い」は、「悪」と訳することができる言葉です。イエス様が、「悪より救い出したまえ」と祈りなさいと命じられたのと同じ祈りです。悪事は、私たちを引き付けようとします。その罠に私たちが引っかかるように仕向けてきます。心の望むままに行えば、悪を行うのはごく自然です。善を行なうのが、信仰によるはっきりとした決断が要されるのであり、困難なのです。けれども、遠ざけてください、とヤベツは祈りました。

それによって、彼は苦しむことがなくなる、と言っています。そうです、悪を行なうことは容易いし、自分の自然の流れであるように思われます。しかし、悪はその時は満足感を与えますが、すぐ後には苦しみをもたらします。この悲しみの中に生きることがないように、とヤベツは祈っています。自分の名前はそのような意味があるけれども、私はそうならないように、という願い求めなのです。

私たちも、自滅的、自虐的な性向を持っていないでしょうか？つまり、自分はどうせ罪を犯してしまう。自分は罪を犯してその力に負けて滅ぼされてしまう。この力には抗うことはできない、と。いいえ、ヤベツの祈りを捧げてください。自分を祝福してください、地境を拓けてください、そして御手が置かれて、悪から遠ざけてくださいように、と祈ってください。ヤベツと同じように、確かに生まれながらの私たちは罪とその苦しみの中にありました。けれども、キリストの死によって罪の縄目から解放されて、アブラハムの祝福の中に置かれています。

3 A 祈りの答え

そして福音は、主はこの願い求めを聞いてくださるということです。「そこで神は彼の願ったことをかなえられた。」とあります。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。（1ヨハネ 5:14-15）」今、祈る時を持ちましょう。この祈りを捧げれば、主がその願いを聞いて、それがすでにかなえられたことを知ります。